

第 48 回社会思想史学会大会（於南山大学）

セッションE 伊波普猷研究の新展開：崎濱紗奈『伊波普猷の政治と哲学：日琉同祖論再読』を読む（2023年10月29日）

報告者：崎濱紗奈（東京大学・非会員）

討論者：富山一郎（同志社大学・非会員）・三笥利幸（立命館大学）

世話人・司会：馬路智仁（東京大学）

参加人数：約 20 名

本セッションでは 2022 年秋に刊行された崎濱紗奈『伊波普猷の政治と哲学：日琉同祖論再読』（法政大学出版局）の書評会を開催した。本書は、一方で柳田国男や折口信夫といった民俗学者から、他方でデリダやランシエールといったフランス現代思想まで、幅広く対話しながら、近代日本における沖縄研究の嚆矢・伊波普猷の著作を分析したものである。セッションでは、まず司会の馬路から、本書を改めて社会思想史学会の場で取り上げる意義が説明された。

次に、本書の著者・崎濱より、本書の要旨についての簡潔な報告がなされた。その報告内容は、本書序章の冒頭で示された以下の陳述を、崎濱自身が分かり易く提示するものであった。「本書は、近代沖縄を代表する知識人・伊波普猷（1876-1947）の思想、とりわけその中心的主題たる『日琉同祖論』について、脱構築的に読解することを目指す。これは、従来（『日本』への）同化（日本からの）異化という二項対立構造において読解されてきた『日琉同祖論』を、こうした枠組みから解放する試みである。同時に、『政治』を外部的に抹消せんとする伊波の『日琉同祖論』という堅牢な構築物——本書ではこれを〈政治神学〉と呼ぶ——が、内側に含みもつ『微細だが決定的な歪みやずれ』を契機として開始される脱構築という運動を通じて、抹消不可能なものとして「政治」が残り続けることを明らかにする。さらにこれは、『政治』を開始するための場としての〈主体〉について思考するための予備作業でもある」（『伊波普猷の政治と哲学』、1 頁）。また、合わせて崎濱が強調したのは、彼女が伊波の「日琉同祖論」について、従来と異なる解釈を目指した際の動機であった。それは、伊波の思想を詳細に分析したいというよりも、伊波が提示しようとした問い——資本主義と「政治」の関係——を、現在において再検討したいという欲求からであったと崎濱は説明した。

続いて、討論者である富山一郎、三笥利幸から、本書の意義が改めて整理され、各々の観点から論点と質問が提示された。それらは多岐にわたるため抜粋して紹介すると、三笥は、氏の（もう一つの）専門でもあるマックス・ウェーバーの思想・哲学を比較参照しつつ、伊波とウェーバーにおける進化論を含む「自然科学」の受容と、伊波自身の所論への具体的な取り込み方について展開した。曰く、「伊波の態度は、当時の『自然科学』的な知見を積極的に——悪く言えば無批判に——取り入れている。……（中略）崎濱は伊波が『蘇鉄地獄』

によって『進化論的発想から脱却』し——それまでの社会活動は『虚しい』ものだったという諦念を伊波に認め——、『郷土論的転回』へ向かうと強調するが、伊波の『郷土論的展開』には『蘇鉄地獄』以外の要因にも目を配ってみることができるのではないかと、ということである」（三笈氏の討論ペーパー、4頁より）。また三笈は、伊波はなぜ資本主義と「政治」の関係を考察する中で古謡研究（「おもろ」をはじめとする）という手法を採用したのか、それは単なる方法論への問いを超えて、伊波の思想・哲学を理解する上で重要であろうと指摘した。

富山は、氏自身の研究を含むこれまでの伊波研究・沖縄研究の流れの中に本書を位置づけ直した上で、本書の重要な意義の一つは、伊波の読解を通じて思想史とは何をする事なのかという大きな問いを投げかけている点にあると指摘した。曰く、「伊波普猷を読むとはこの主体生成のプロジェクトに参加することなのだ」と本書は主張している。……（中略）瞬きを目撃する私たちは、主体生成のプロジェクトに巻き込まれていく。そして本書を読む者は、本書の冒頭で述べられた「沖縄近現代思想史というプロジェクトに参加することを試み」ることが、この主体生成のプロジェクトであり、政治を駆動させる営みであることを最後に知らされるのだ。プロジェクトに参加することが思想史研究であり、それは主体の瞬きを目撃することなのだ。明言されていないが、ここには思想史を研究するとは何かというアカデミアへの極めて重大な問いかけがあるのではないだろうか」（富山氏の討論ペーパー、5-6頁より）。また富山は、本書が提示した伊波における天皇と本源的蓄積の関係づけを高く評価し（「伊波の日琉同祖論の試みは琉球史における天皇への挑戦なのだ。そしてさらにこの王権（すなわち天皇）の根源的な暴力を、本源的蓄積と重ね合わせる。天皇と本源的蓄積。本書が伊波普猷を通して提出した問題提起は、きわめて重大である」（同ペーパー、4頁より））、それと絡める形で伊波の思想遍歴の一つの転換点となった「蘇轍地獄」の持つ「歴史性」について問題提起を行った。

二人の討論者の指摘を受けて、崎濱は自身の問題意識をさらに展開しながら、丁寧に応答した。加えてフロアから、数点の質問が提起された。最後に、司会の馬路が、本書を届けたい想定読者の広がりほどのようなものと質問した。それに対して崎濱は、沖縄研究という枠を超えて、思想・哲学を通し現実の世界のあり方を変えたいと望む全ての人に読んでもらいたい、と応答した。その言葉のとおり、本書が沖縄研究に携わる者を大きく超え出て、広範な読者層に届くことを強く願わずにはいられない。このセッションの場が、こうした浸透の契機となれば幸いである。